

阿毘達磨燈論釈における *Īśvara* 批判

広 瀬 智 一

〔序〕

G・チエンバラティは「インドの合理的神学、ウダヤナの『論理の花束』序説」⁽¹⁾において、インド哲学思想史上いわゆる有神論諸学派の説く自在神 (*Īśvara*, 主宰神) の起源、発展過程、内面的考証などの問題へアプローチする論証方法として (一) 論理的推理にもとづく「哲学的」 (*philosophical*)、⁽²⁾ 「合理的」 (*rational*) 方法、(二) 聖典の権威にもとづく「神学的」 (*theological*)、⁽³⁾ 「聖典主義的」 (*scriptural*) 方法とに識別せられているが、従来インド哲学における神の証明をめぐる諸問題について内外の諸先学により多様な論究がなされてきたことである。⁽²⁾ これはインド哲学の領域のみならず伝統的インド仏教学派内においても「無神論」「破神論」をめぐる問題として論議される。そして学者の指摘によれば、⁽³⁾ 仏教学派内の「破神論」の論証系統には仏教論理学派に属するものと属さないものとの兩派あるとせられる。しかし有神論 (*Īśvara-vāda*, *seśvara-vāda*)、有神論者 (*Īśvara-vādin*, *seśvara-vādin*, *astika*, *vaidika*) など、⁽³⁾ 無神論 (*anīśvara-vāda*, *nirīśvara-vāda*)、無神論者 (*anīśvara-vādin*, *nirīśvara-vādin*, *nāstika*, *avaidika*) などという名称でもその概念規定や神学的意味、視点の置き方によって短絡

的に二分化するほど単純なものではないように思われる。周知の如く仏教は本来教義学的にも実践倫理的にも無神論の立場をとる宗教であるが、⁽⁴⁾ 神の存在をめぐる問題には多様な意味が複合的に深く混在し合い、学派相互の批判反批判が様々な時代思潮の起伏を伴ってくりひろげられてきたニュアンスが認められるのである。たとえば、バガヴァン (bhagavan) やイーシュヴァラ (isvara) 語義の転化例など、⁽⁵⁾ 両語ともリグ・ヴェーダ時代には唯物論的意味であったのが唯心論的意味へ転化した典型であるとされる。物質的富、食物を増大する働きないしその担い手を意味した。派生語 aisvarya-karmanah も富、生活手段を製造生産する活動を意味する同類の語として把握されるべきである。

本稿は仏教学派内で最も実在論的傾向の濃いヴァイバーシカ学派 (Vaishika) の一論書『阿毘達磨灯論釈』を取りあげそのなかで論駁される自在神 (isvara) 批判の根拠および批判のあり方が如何なる文脈のもとに論じられるかを断片資料をもとに検討することにある。

さて、アビダルマ仏教の綱要書『俱舍論』(Abhidharmakosāhasya) (AKB と略称) の作者 (Kosakāra) にして大乘への転向者世親 (Vasubandhu) を敵者と目すユニークな註釈書『阿毘達磨灯論釈』(Abhidharmadīpa-vibhāṣāprabhāvṛtti) (ADV と略称) が一九五九年、P・S・ジャイニにより校訂出版され更に原典の補正をおこなない新製本第二版として一九七七年世に送り出されて以来、⁽⁷⁾ 内外の多様な研究成果をえ注目されて久しい。⁽⁸⁾ しかし作者不詳、作成年代の未確定など学説面を含めアビダルマの資料として解読、説明すべき箇所がまだ多く残されているように思われる。

そこでまず (I) ADV の論釈される自在神 (isvara) の性格、批判のあり方に焦点をあてることによりアビダル

マ思想形成史における同論の位置、年代設定の基準の傍証ないしその端緒を捜し求めんとすること、(二)自在神批判の根拠を検討することによってヴァイバーシカ学派の学説の本質が何辺に存するかを確かめることである。しかしそのような自在神(Isvara)の解明を得るためにはインド哲学全般にわたる膨大な文献の調査がなされねばならないであろう。従って本稿はインド哲学思想史の流れからみればきわめて局部的考察の対象にすぎないものである。ここでは当面 ADV の形成という視点に立って以下断片資料と若干の関係文脈をもとに検討してゆくことにした。

- (1) George Chemparathy, *An Indian Rational Theology. Introduction to Udayana's Nyāyākusumāñjali*. Publications of the De Nobil Research, Library, vol. I, Vienna 1972, Preface p. 7. 辻直四郎博士の批評を紹介「東洋学報」(56-2-3, 4) 一九七五年三月、二六〇—二六三頁参照。
- (2) H. Jacobi, *Die Entwicklung der Gottesidee bei den Indem und deren Beweise für das Dasein Gottes*, Bonn und Leipzig, 1923. 山田龍城・伊藤和男共訳「印度古代神観史」大東出版社、昭和十五年。山本快龍「六派哲学に於ける神の問題」(『宗教研究』臨時特輯号「現代佛教の研究」所収)、九六一—一六頁。雲井昭善「インド哲学における有神論をめぐる諸問題」(『大谷学報』四六—一)、同「ヨーガ・ストラにおける自在神」(同五一—四)、同「インドにおける神の観念」(『仏教思想史』)所収)、一九七九年。同「仏教思想の因果」所収、平楽寺書店、一九七八年。今西順吉「ヨーガの師——自在神について」(『日本仏教学会年報』三六号所収)。George Chemparathy, *The Testimony of the Yuktidipika Concerning the Isvara Doctrine of the Pāśūpātas and Vaiśeṣikas*. WZKSÖ Bd. IX, 1965. 瓜生津隆真「イーシヴァマラ・ギーターにおけるアートのマンの概念」(中村元編「自我と無我」所収、平楽寺書店、一九六八年)、三五七—三七八頁。泰本融「東洋論理の構造」法政大学出版局、一九七六年、一四三—二一三頁。木村俊彦「正理・勝論学派の有神論に対する仏教論理学派の批判(一)——ダルマキールティに於ける——」(『文化』三四—三三三号所収、一九七〇年、七〇—一〇二頁)。
羽田野伯猷・木村俊彦「正理・勝論派神論の研究——ウィーン学派における——」(『文化』三五—一四四所収、一九七二年、一四一—一五一頁)。
田村智淳「ブラジュナーカラムティの有神論批判」(『南都佛教』二七号所収、一九七一年、一一—二二頁)。
山口益「中観仏教における有神論の批判」(『山口益仏教学文集下』)所収、春秋社、昭和四八年、二二五—二四九頁。

- Dehiprasad Chattopadhyaya, *Indian Atheism*, Calcutta, 1969. 佐藤在「インド思想のイデオロギ」(「マーン・ヴェーダ研究」九号所収、一九七九年版) 大阪、四二—四四頁) 等参照。
- (3) 秋辺重朗「仏教論理学派の破神論——シムンタトシヤ・シムンタラシタの場合」(「玉城康四郎遺稿記念論集」所収)、春風社、昭和五二年、五七九—五九三頁。宮坂宥勝「チベット藏経に在る破神論の梵文資料」(「中野教授古稀記念論文集」所収)、一九六〇年、二八一—三〇一頁。ナーカールシムナ作とされる「破自在天作者性及び破毘婆紐一作者性」(*Īśvara-kartṛva-nirākṛti, viśnoreka kartṛva-nirākāraṇa-nāma; Dbañ-phyug byed-pa-po-ñid sel-ba dan khyab-hing byed-pa-po cig-ñid sel-bar byed-pa shes-bya-ba*, 菩提路 No. 5905 vol. 149, p. 158, 346a⁺-347b⁺ 東洋 No. 4461) 梵文原典校訂及び和訳と擧げられ、JRAS, 1903, pp. 345-349, 703, George Chemparathy, 'Two early Buddhist Refutations of the Existence of Īśvara as the Creator of the Universe, Festschrift für Frauwallner, 1968, pp. 85-100. Th. Stcherbatsky, *A. Buddhis Philosopher on Monathelism, Papers of Th. Stcherbatsky, Soviet Indology Series. No. 2, Indian Studies Past & Present*, 1969, pp. 1-16.
- (4) 金倉國照「インド哲学仏教学研究Ⅲ」春秋社、昭和五十一年、四二六—二七頁。中村 元「ホータマ・ソッタ・釋尊傳」法藏館、昭和五四年増補の刷、一三六頁参照。
- (5) D. Chattopadhyaya, *Lokāyata, A Study in Ancient Indian Materialism*, People's Publishing House, New Delhi, 3rd. ed. 1973, pp. 553-4. 佐藤在説「ローカーヤタ・古代インド唯物論」大阪、阿修羅館刊、一九七〇、五三三—五六頁参照。
- (6) Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, ed. by P. pradhan, *Tibetan Sanskrit Works Series*, vol. VIII, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, First Edition 1967, Second Edition 1975. 本稿は佐藤在博士著、阿修羅館刊、Abhidharmakośa & Bhāṣya of Ācāryavasubandhu with Sphuṭārtha Commentary of Ācārya Yaśomitra, Critically ed. by S.P. Shastri, *Bauddha Bharati Series-5* (1970), -6 (1971), -7 (1972), -9 (1973)。
- (7) Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāṅgī, ed. by P.S. Jaini, *Tibetan Sanskrit Works Series*, vol. IV, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, First Edition 1959, Second Edition 1977. 本稿は第三版を使用。
- (8) 吉元信行「インドマニヤーマニカニヤの三世実有論」(印仏研二八一—二所収)、昭和五四年十二月、三三三—三六頁参照。

〈(経の)梵 (brahman) に至るべき道 (sāhya) なるを説諭せらる。部衆 (parisad) を統べるかひでその (sambandhat)°。なんとなれば彼は自らの部衆の中をめぐりてマシムウマシムト比丘にたよつて (asvajita bhikṣuṇā) 問がとわれた。『それら四大種は何処において残りなく消滅するのか。』と知らず。矯乱 (kṣepa) の言を放った——『我は梵、大梵天、自在神、作者、變化者、創造者、産出者、諸の存在の父たる如きものである (ahamasmi brahmā mahābrahmā īśvaraḥ kartā nirmatā sraṣṭā sṛjāḥ pitṛbhūto bhāvānām)』とは語じ了解せられべきべし。〉

断片一はなほとて之 AKB II-31b (p. 59¹¹⁻¹⁴; D 版 ku 68a⁴⁻⁶; a 版 No. 115, p. 146 gu 76b⁴⁻⁷; 『俱舍論』卷四(大正二九、二〇〇—二二 a)、『俱舍論』卷三(大正二九、一七九〇—一八〇 a)と同じ。ヤシエーニトヲは〈自在神とは支配の性質を有するもの (īśvara īśana-śīlah)° karti, nirmatī, sraṣṭī, sṛjā 同義語 (paryāya)° 或は引を統る釈説する方法に於て (uttarōttara-vyākhyā-yoga)〉と云ふ (Sakv. p. 136⁵⁻⁶; Shastri 本 p. 200²⁶; a 版 No. 5593, vol. 116, p. 100, 140b⁷⁻⁸; Pūrṇavaradhana, No. 5594, vol. 117, p. 153, 167a⁷-b⁵; Shīramati, No. 5875, vol. 146, p. 285, 227b⁸-228a⁶)。文中のミニマムニットト云の物語は『俱舍論』キヤニット註釈ニヤタゾーゾマ (Śamathadeva, Shi-gnas lha) の『阿毘達磨論註』(Abhidharmakośa-īkōpāyikā-nāma; Chos mñon-pahi mdsod-kyi ḡgrel-bśad ñe-bar-mkho-ba shes-bya-ba. D 版 No. 5595, vol. 118, p. 125, 69a⁵ 東洋 No. 4094) に

よって示されており、これは「長阿含」卷十六「堅固經」(大正一、一〇一b—一〇二c。DN XI 80-83 Kevaddhasutta)に相当する。「婆沙論」卷二二九(大正二七、六七〇c—六七一a)では自在神批判の一論拠となっている。また同論卷一九九(大正二七、九九六b以下)には「梵網經」(Brahmajāla sutta)に説く六十二悪見趣が説かれ、バーリ・ヒカーヤでは(一)宿作因説 (pubbēkakatāhetu) (二)自在化作因説 (issaranimāṇāhetu) (三)無因無緣説 (ahetu-appaccaya) に分別して批判されるのはよく指摘される。(Ang. N.I. p. 173. 大正一、四三二—四三六a)。因みに大乘の論典「瑜伽師地論」卷六(大正三〇、三〇三c)以下に「十六種の異論」(sodāsa paravāda⁽¹⁾) が列挙され各異論を釈説しているのが注意される。それは次のようなものである。

- (1) 因中有果論 (hetuphalasadvādaḥ)
- (2) 從緣顛了論 (abhiyaktivādaḥ)
- (3) 去來実有論 (atītanāgatadvayasadvādaḥ)
- (4) 計我論 (ātmavādaḥ)
- (5) 計常論 (śaśvatavādaḥ)
- (6) 宿作因論 (pūrvakṛtāhetusadvādaḥ)
- (7) 計自在等、為作諸論 (īśvarādīkartikavādaḥ)
- (8) 害為正法論 (himsādharmavādaḥ)
- (9) 有辺無辺論 (antānantikavādaḥ)
- (10) 不死矯乱論 (amarāvīkṣepavādaḥ)

- (11) 無因見論 (ahetu-vādaḥ)
- (12) 断見論 (ucchedavādaḥ)
- (13) 空見論 (nāstikavādaḥ)
- (14) 妄計、最勝、論 (ugravādaḥ)
- (15) 妄計、清淨、論 (kautuka suddhivādaḥ)
- (16) 妄計、吉祥、論 (kautuka mangalavādaḥ)

このうち(10)の女註訳では、amaraは鰻の意で不死(amara)でなく鰻のようにヌラヌラして捕捉し難い鰻論法で一種の詭弁論のごときもので適訳でない⁽²⁾とせられた。(7)の自在等作者の創造説がこの場合の批判の対象であることとなるが、ADVでは先のムーリ・ニカーヤ、阿含の論証形態をそのまま踏襲し独自の論の展開は見られない。⁽³⁾

- (1) The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga, ed. by V. Bhattacharya, pt. I, University of Calcutta, 1957 p. 144^f. (7)の異論は巻七(大正三〇・三〇九^a以下)『ibid. pp. 144^s-145^s』中村元『初期のヴェーダーンタ哲学』岩波書店、昭和二五年三三二―三三五頁。金倉圓照『仏身觀と外教の交渉』(中村瑞隆編『法華經の思想と基盤』)所収、平楽寺書店、一九八〇年、二二―一五頁。西義雄『原始仏教における人間觀』(『東洋学研究』二)所収、一九六五年、一九頁参照。
- (2) 宇井伯寿『印度哲学研究』二、岩波書店、昭和四〇年、三六三―三四頁。山内得立『ロゴスとレンマ』岩波書店、昭和四九年、六九―七〇頁参照。
- (3) 宇井伯寿、前掲書、四〇七―八頁。同著『印度哲学研究』三、一〇〇―一〇七、一四三―六頁。舟橋一哉『業の研究』法藏館、昭和二九年、二頁以下。雲井昭善『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店、一九六七年、二八四―六頁。二九五―八頁。『山口益仏教学文集下』春秋社、昭和四八年、二一九―二二六頁。藤田宏達『原始仏教における業思想』(雲井昭善編『業思想研究』)所収、平楽寺書店、昭和五四年、九九―一四四頁参照。

【斷五二】 ADV p. 118¹²⁻¹⁶

『身体に属するものと語よりなれるものとまたしく思と名づけられた意とである。これら諸業が世界の因であり、自在神等ではない』^(一) [(kāyikaṃ vānimayaṃ caiva cetanākhyāṃ ca mānasam/karmāṅyatāni lokasya kāraṇaṃ neśvarādayaṅ // Kā. 155 //)

実これら淨と不淨なる三業が利と不利益の動力因として生起し盛んになるとき、有情と器世間の二種の差別の原因となる。自在神 (īśvara) ・ 時間 (kāla) ・ 純粹精神 (puruṣa) ・ 根本原質 (pradhāna) 等ではない。

ADV Kā. 155 は、答へて AKB IV-1cd (p. 192¹⁵⁻¹⁷) と相対するが、ADV は論ずる īśvara 等ではなく、AKB II-64 (p. 101¹⁹⁻¹⁰²¹⁷) の文脈に符合する。すなわち、反論者の答へて、諸の存在は諸の因縁によつて生じた一切の世界は īśvara, puruṣa, pradhāna 等唯一なる者を原因として生ずるものではない。とすると論証の仕方では、要するに世界にとつて唯一なる因は存在しないこと、有情の諸業 (karmāṅ) が各人の生存において自らを生ぜしめること、覺知を修むない哀れな者たち (varākaḥ) は個別な īśvara を邪執し分別するところのものである。ヤシモーターラは īśvara 等の「等」の語によつて時間・自在・極微等を異な (īśvara-puruṣa-pradhānī ādikam iti ādisabdena kāla-svabhāva-paramānu-ādi ghyate) とする。 (Sakv. p. 237¹²⁻¹³; Shastri 4 p. 351²⁸)

ヤシモーターラ学派の業説 (karma-vāda) は、よつて一切の業は、よつて場所をよつて、【論事】 (Kathāvattu,

XVII-3)の業論者の説「スッタニピータ」(Suttanipāṭa, 645)など伝統的業説をよまえたものとして確認されている。しかし、後世アビダルマ学派内で論争の種となったのはまさにこの業説をめぐってであった。仏陀世尊の三昧力 (samādhibala, 瞑想力) によって自己の寿命を自在に延長できるといふ延命力が問題となった。それが明らかに業 (kamma) の法則に抵触するという難点である。ADV Ka. 138 に対する註釈部へもしも世尊が三昧力によって自己の意のままに新たな生きた人格を生ずることができ、或はヨーガの力 (yogabala) によって業 (kamma) から独立に新たな寿命を産み出すことができるならば、それでは実に仏陀世尊は那羅延天 (nālayana) に変身するだろう。また世尊は慈悲を有するものであるから (karuṇīkatvā) 決して般涅槃しないであろう。へとは延命自在力を承認する大乘への転向者俱舍論作者世親 (Kosakara Vasubandhu) の非正統性をヴァイバーシカ学派の立場から難詰したものである。Kosakaraによればこの新たな生命力は三昧 (samādhi) の結果で業 (kamma) にもとづくものではないとする。ここには例えば大乘の『法華経』如来寿命品 (tathāgatāyuspramāṇaparivarta)、『無量寿経』(Sukhāvati-vyūha) など開示される仏陀寿命の永遠無限性、超越的神秘化への軌跡、「久遠実成」の仏陀の信仰世界への淵源が伏線となっているように思われる。⁽³⁾

- (1) 三友健容「『アビダルマディーパ』業品の検討(一)」(『佛教学』7号所収、一九七九、六五—九頁参照)。
- (2) ADV p. 101²⁻⁷
- (3) cf. P. S. Jami, Buddha's Prolongation of Life. BSOAS. vol. XXI, pt. 3. 1958, pp. 550-1.

【断片田】ADV pp. 119-120²

へ「多種なる順序次第より生起するが故に。それを有するものと他のものと結合する結果となる故に。他に依

存じなご (nānyāpekṣā)：苦行の修練 (tapoyoga) は主張 (pakṣa) の放棄 (hanī, 不履行) 等の過失がある故に。」(vaiśvarūpyāt kramotpādātadvadanyatprasāngatah/nānyāpekṣā tapoyogo pakṣāhānyādidosatah//Ka. 156//)。もしも実に唯一常住なる自在神 (īśvara) が世界の生 (utpatti)・住 (sthiti)・滅 (pralaya) の原因であるとすれば、実に彼 (īśvara) によって原因が随順されるから、これら三つの矛盾せるものが同時に存在することになるであらう。しかしこのことは経験されず或は認められない。だからこのことはありえない。しかも世界は差別をえなくなるであらう。また裸形者 (nagna) と憍慢を手に持つ者 (Kapalapanī—kāpālika, シヴァ派のカームーリカ派か?) とが同時に出現し歩き廻る(遊行)であらう。またそのの意欲に随順するものとならう。しかしこのようなことはない。それ故、自在神 (īśvara) は(世界の)原因ではない。すべて卓越せる支配者 (adhipati) が村落 (grāma) 等を確立するところから自在神 (īśvara) としてよく知られているというならば、そうではない。この世において村落に任命されているからである。他に依存し (paratantra) 無常なるもの (anityatra) 結果と相違する能力 (kāryāntarasakti) によって障礙等 (vighātādi) が見られるからである。また『牛糞論経』(Gomayapīṇḍopamasūtra) に説かれているからである。またナーガヴァマ派 (Bhāgavata) 等によって彼 (īśvara) の誹謗を見るからである。実に、ンガヴァット等によって大自在天 (mahēśvara) の誹謗するべきことが経験されるから。そして(逆に)大自在天派 (Mahēśvara) がヴィシシュヌ (viṣṇu) を(誹謗するべきが見られるからである)という。』

断片 III で引証される『牛糞論経』(Gomayapīṇḍa sūtra; SN III. p. 144, 『雜阿含』卷十、大正二、六七〇—六八

b. 『中阿含』卷十一、大正一、四九六a—四九七a。同卷三四、大正一、六四五c—六四六c。c. 『婆沙論』卷八二、大正二七、四二四a.c. の趣意はへ世尊が牛糞を手に執り比丘に示して少しも常住不変の実体の存しないことを説き仏陀の宿世を喩証に五欲を離れ解脱を求むべきことを諭すところにある。この経は AKB 『順正理論』 『顕宗論』には引かれない。また如上の外教諸派の誹謗、嘲弄の態度のあらわれは宗教地理学上、時代的信仰文化圏の基盤によるものか、或は単に仏教徒側からみた外教の信仰形態を暗示するものなのか注目される。因みに『大唐西域記』⁽²⁾ などには実際、大自在天 (mahesvara) に仕える塗灰外道の信奉者の記録がみられる。また AKB の〈諸法一因性の否定〉に対する玄奘門下の上足普光の『俱舍論記』⁽³⁾、法宝の『俱舍論疏』⁽⁴⁾ の註釈に同様塗灰外道の自在天説、勝論 (Vaisesika) の我説、数論 (Samkhya) の勝性説を併記する。但し釈説通りその学派学説に妥当するかは検討を要しよう。

以上が ADVKa 156 ab に対する註釈部の全容である。

- (1) tapoyoga, tapobala の語に ついて、合成語の yoga が dvandra か tatpuruṣa から判読しがたい点、tapas の全能性と有限性・可滅・不可能性についての論考は原典『古代インドの苦行』春秋社、昭和五四年、六四、九〇—、一一五、三六三—三八四頁。また Tapas (熱力) の起源について、辻直四郎訳「リグ・ヴェーダ讃歌」三〇九頁、同訳『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌—古代インド呪法—』二〇四頁、岩波文庫。花木泰堅「Tapas について」(千鴻博士古稀記念論文集) 所収、昭和三年、三三—三三三頁。J.W. de Jong, The Background of Early Buddhism, 印仏研二二—、四二九—四二六頁。三友健吾、前掲書、六八頁等参照。
- (2) 『大唐西域記』卷一 (迦華試国 Kapsi, 大正五一、八七三 c)、卷四 (罽羅聖地羅国 Ahi-chattrā, 大正五一、八九三 a)、卷七 (婆羅痾斯国 Varānaṣī, 大正五一、九〇五 b)。水谷真成訳『大唐西域記』(中国古典文学大系 22) 平凡社、昭和四六年、四七一—九、一五七、二二—五頁参照。
- (3) 『俱舍論記』卷七 (大正四一、一三九 b)。更に自在天説と法身・受用身・化身の三身説との関係について (大正四一、一

四〇a)、通倫集撰「瑜伽論記」卷二(大正四二、三五〇b)、吉藏撰「中觀論疏」卷第一末(大正四二、一四c)。金倉圓照博士は「仏身觀と外教の交渉」(前掲書三一—八頁)で仏身觀と外教の三身説をめぐる問題点を指摘せられている。

(4) 『俱舍論疏』卷七(大正四一、五七九b)。

〔断片N〕 ADV p. 120^{a-e}

〈実たもしも助力因(sahakarīkaraṇa, 協同因)に依存するものが、また、苦行の力(tapobala)によって獲得された自在力(aīśvarya)が世界(loka)を創造するならば、瞋(ghāta)等がくべる陶工(kumbhakarā)の如きものである。そうではない。またこのよびであるならば前主張(pūrvaśakṣa, 自在神論者)は放棄されるものとなる。およそ常住にして唯一者たる自存者(svatantra)が原因であると説かれるのは欠陥がある(hīna)。また、苦行の力(tapobala)の能力(sāmarthya)が認許される場合だけ(abhyupagame)‘無常性(anityatva)’依他起なるもの(paratantrya)も既に許されるものとなる。それを許すから無自在力(anaiśvarya)なのである。だから、これによつて時間(kāla)・純粹精神(puruṣa)・根本原質(pradhāna)等を原因(kāraṇa)とする把握は受け入れられないと知らるべきである(etenā kālapuruṣapradhānādī-kāraṇa-parigrahāḥ pratyūdhā veditavyāḥ)〉。

断片Nの助力因(sahakarīkaraṇa)を期待すること、タムスの力によって獲得された自在力により世界創造が成立するとすれば、それは壺作りの陶工(kumbhakarā)に等しいとする論証の仕方ない。ADV 最後部の内容は仏教内外の諸処に散見され関連づけられよう。

＜『支配者を持たなす』(anadhiṣṭhāṭkratva) への依存や『自存』(pāratantṛya) への依る』(Ka. 389ab)

なんでもそこをめぐっては純粹精神 (puruṣa)‘ 或は最高主神 (parameṣṭhin)‘ 或は自在神 (īśvara)‘ 自存力 (svatantra) やその唯一者 (eka) は存在しない。それと一切の形成されたもの (sarvasanskārāṅ) は他に依存して生ずる相識 (prasara, 勢用) であり、自相と共相とを支配したのである (svasāmānyalakṣaṇādh. iṣṭhasvabhāvāṅ) である。』(Ka. 389cd) 観察の中心は神と自己 (parīkṣyamānasya)‘

『無我なる一切の事物を対して堅固なる知がなしたるべ。(sarvadharme [su nai] rātmnye sthira buddhiṅ pravartate。)] (Ka. 389cd)°。

すなわち眼た説かれた——

『一切の事物は無我であると知恵をよって見るとき、ひとは苦しみから離れる。これが清浄となる道である。』(“sarvadharmā anātmanāḥ paśyati prajñayā yada/ tada nirvidyate duḥkhaḍeṣa mārgo viśuddhaye。”)°。

新正 V の最後語は有名な『法句經』(Dhammapada, XX-7) をその語一切有無 (Sarvāśivādin) の翻譯としてある『ウマナーナヴァルガ』(Udanavarga, XII-8) の短歌に於いては明らかであるが多少の字句、語順の差異が認められる。ADV の大派の證據は AKB, 『國田照論』『國田論』など見出しをなす。因みに、一ツ點『法句經』

(A)とサンسكريット語種別綴文(B)、『ウダーナヴァンガ』(C)、『ガンダーラ語『法句經』(D)』、それを最近 N.S. Shukla 及び 田邊ゆき子 『The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada』 (Tibetan Sanskrit Works Series No. XIX) 中の XX-17 號 (374) (E) を比較対象として示すのは次のとおりである。

- ㉔ “sabbe dhammā anattā ‘ti yadā paññāya passati/atha nibbindati dukkhe esa maggo visuddhiyā // 7 //”⁽¹⁾ (279)
- ㉕ “sarve dharmā anātmāna iti yadā prajñayā paśyati/atha nirvīdati dukkhāni eṣa mārgo viśuddhaye // 7 //”⁽²⁾ (279)
- ㉖ “sarvadharmā anātmānaḥ prajñayā paśyate yadā/atha nirvidyate dukkhād eṣa mārgo viśuddhaye // 8 //”⁽³⁾
- ㉗ “sarvi dhama aṅatva di yada paśādi cakkhūma/tada nivinadi dukha eṣa mago viśodhi’a. (29)”⁽⁴⁾
- ㉘ “sabba dhammā anāttā ti / yato praññāya paśāti/atha nibbīṇate dukkhā/esa māggo viśuddhiye // 17 //”⁽⁵⁾

以上の ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ の ADV の偶を比較すると ADV の原文で最も近似しているのは ㉔ ㉕ より ㉖ の方であり、相違点は語彙で paśyati (ADV) ←→ paśyate ㉕ / tadā (ADV) ←→ atha ㉖ の二箇所、語順で prajñayā → paśyati の部分が前後するだけである。ただガンダーラ語 ㉖ の綴文での 29c の字句 (tada nivinadi dukha) と隠れた ADV と最もよく対応するようと思われる。また ㉗ は (A) と殆ど同類の綴文である。『法句經』全体にわたる厳密な比較検討を要すべきであるが少なくとも ADV 断片箇所は有部所伝の ㉖ を教証としているようである。換言すれば

ADV によつての「マターナムルガ」が説一切有部 (Sarvāstivādin) 所伝のものである確証を指摘されたところである。

- (1) Rāhula Sānikṭyāyana, Dharmapada, Buddhavihāra, 1965 p. 124¹¹⁻¹² 水野弘元「法句經対照表」(『仏教研究』第五号 国際仏教徒協会、昭和五十一年三月、三七七頁 (anattāti, nibbindati)° 丹桂実徳「法句經の対照研究—法句經の発展成立史研究」高野山大学 日本印度学会 一九六八年、七五頁 (“sabbe dhammā anatā” ti, atho, nibbindati)° 法句經について)の文献内容等の詳細は、水野弘元「法句經について」(『仏教研究』第二号、国際仏教徒協会、昭和四十七年三月、一四四—一五六頁。中村元訳「マターの真理のことばは感興のことば」岩波文庫、一九七八年、三七三—三九三頁「あとがき」参照)。
- (2) Rāhula Sānikṭyāyana, *ibid.* p. 124¹³⁻¹⁴
- (3) Udānavarga, herausgegeben von Franz Bernhard. Band I, Sanskrittexte aus den Turfanfunden X. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-Historische Klasse. Dritte Folge, Nr. 54, Göttingen. Vandenhoeck und Ruprecht, 1965. S. 194¹⁻⁵ 丹桂実徳「経緯」二二二頁°
- (4) The Gāndhārī Dharmapada, ed. with an Introduction and Commentary by John Brough, (London Oriental Series, vol. 7) London, Oxford University Press, 1962. p. 134. Udānavarga von Franz Bernhard, *ibid.*, S. 194, G. Dh. VI. 29c : *tada nīvinadi āhha.*
- (5) The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada, ed. by N.S. Shukla, K.P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1979. p. 40¹¹⁻¹⁴

〔訳註〕 ADV p. 120¹⁰⁻¹⁸

〈業はカマ (karma) が原因 (kāraṇa) であり、自在神等 (īśvarādi) ではない〉と述べ、カマ (karma) の因果 (loka) はその原因を把握するのしか (いふ) 議論者になして)。そこで我々は云う——

『諸業の能力 (sakti) は儀軌 (vidhi)・時間 (kāla)・撰取 (graha) 等によつて知覚される。それ故、それら

において諸の能力 (sakti) がある以上、第二義的はたゞも適合すべし⁽¹⁾』 (karmaṇām bodhyate saktirvidhikalagrahādibhiḥ/yato'as tesu taccchadayaṃ gauṇyā vṛtityā prayujyate // Kā. 157 //)。
すなわち既に説かれた——

『儀軌 (vidhi) ・命令 (vidhāna) ・必然性 (niyati) ・自性 (svabhāva) ・時間 (kāla) ・攝取 (graha) ・自在 神 (īśvara) ・業 (karma) ・運命 (daiva)』 諸の善福なる同義異名 (parāyanāmani) は先になられたもの だとして教義に適合す。』 (vidhirvidhānaṃ niyatīḥ svabhāvah kālo grahā īśvarakarmadaiyam/puṇyāni bhā (gyā) ni kṛtāntayogah parāyanāmani purākritasya //)。

外教の一連の用語を業 (karman) の能力 (sakti) と対置せしむる ADV の論証の仕方は AKB に確認される。後述するよりのシャーンニは脚註に (1) 『シチュエーター・シチュヴァタラ・ウニニシヤット』 (1.2) (2) 『スミットル・サンヒター』 (iii. 1. 11) の傷を典拠として示す。Kā. 157 は外教の説に対して副次的意義を与えている。これはヴァイバーシカ学派が ADV 作成時代に力を得ていたウニニシヤット、哲学や古典インド医学書の学術文化の光をあびながら ADV 独自で外教との思想的接触をはたしていった証左ではないか。先行の諸原理と混融複合化し自家薬籠中の物となしたものでないかと思われるのである。

(1) 三友健容、前掲書 六八頁。「撰取」に關して、NBh. IV. 1. 21 をよむウニニシヤットカミ (Uddyotakara) の『大統』(vārttika) の解説が想起せらる。ko'nugrahārtāḥ? yadyathābhūtaṃ yasya ca yadā vipākakārahā(3) tattathā tadā viniyujyate. (Nyāyavārttikam, Kāśī Sanskrit Series 33, p. 456²⁰⁻²²) 「撰取の果実を回す。業の果報(果報)の時が来たよる[自在神が]。如実たその者だ[業を]適用するよるよる」 cf. H. Jacobi, *ibid.*, SS. 75, 115¹¹⁻¹², 山田龍城・伊藤和男共訳。

前掲書 一三六頁。山本快龍「六派哲学に於ける神の問題」前掲書 一〇六—一〇七頁参照。また Sv. Up. 1, 2 の svabhāva の意義については、各種の検討を要する。D. Chattopadhyaya, *What is Living and What is Dead in Indian Philosophy*, People's Publishing House, New Delhi, 2nd ed. 1977, pp. 456-7.

【第五 III】 ADV p. 2317-10

〈非因 (akarana) を因なりと取違 (kumaraga) を道なりと把握せることが戒禁取 (戒) (śīlavrataparāmarśa) である。すなわち、互取纏 (pañcopādānaskandha) を本性とするものは勝因 (prakṛti) ・自在神 (īśvara) ・純粹精神 (puruṣa) 等を因とするもので渴愛 (trīṣṇā) を因とするものではなかつた。よつた非因を因なりと見ることはある。また火水へ趣く等の邪行が生天の因たること、勝因と純粹精神との間の相違の知 (prakṛtipuruṣāntarajñāna) 等を解脱の因とすることは邪道である」とも記されている。〉⁽¹⁾

これは世界の原理に関する自在神 (īśvara) 等の非因計因、非道計道を論じて戒禁取 (śīlavrataparāmarśa) を批評す。AKB は、若干語彙のちがひがあるものの同趣旨の論である (AKB V-7, p. 2827-9)。また、これと関連文脈へ数 II (数論派) と瑜伽 (派) との知等 (sāṅkhyayogajñānādayah) は解脱 (mokṣa) の道ではないこととそれらを道なりと見る (AKB p. 2827-10; Shastri 本 p. 773^e-7; D 版 vol. 115, p. 223, 269a³ 但し grāgs-can → grāns-can) は、衆賢の『順正理論』巻四下⁽²⁾ 『顯宗論』巻二五下⁽⁴⁾ は、性と士夫との智等……と釈し prakṛti と puruṣa との相違を立論する数論 (Sāṅkhyā) と釈した ADV の論旨と同類である。

以上の ADV の断片箇所によって若干関係文脈をたどってみることをする。

- (1) prakṛti-yo puruṣa-yo 問の相違の如 (jñāna) なること [Sāṅkhya-Kārikā] 23 及び 24-re [Sāṅkhya-Vṛtti] ka. 37 及び 38 Gaudapāda 〇 [Bhāṣya] Vācaspatimīśra 〇 [Tattvakaumudī] ka. 44 及び 45-re Saṅkara 〇 [Jayamaṅgalā] Madhusūdana-Sarasvatī 〇 [Prashānabhedā] 等の註釋に於ては論證される。金倉圓照「サーンタマ・タットワ・カウマニヤ」(『東北大学文学部研究年報』所収一九五六年、九二—一三頁)、村上真完「サーンタマ哲学研究——インド哲学における自我観——」春秋社、一九七八年、二八二、三〇五、五八一、六五四、七九〇頁参照。
- (2) 教論に瑜伽派の智を指すことには真諦訳『俱舍教論』卷一四(大正二九、二五四a)「唯執僧法臨伽等智」によつて明らかである。『國訳大藏經』論部十一(三六四頁註一一五)『國訳一切經』毘婆沙二十六(七八九頁註一一三)参照。
- (3) 『順正理論』卷四七「道有二種。一増上生道。二決定勝道。投水火等種種邪行。非生天因各第一道。唯受持戒禁性士夫智等。非解脫因妄執為因。各第一道。」(大正二九、六〇六a)。
- (4) 『頭宗論』卷二五(大正二九、八九三c)。

〔關係文脈A〕

斯止の論証形態はニューマンマンヤカ(Bhāvaviveka; Bhavya, A.D. 490-570) 著『中觀之論頌』(Mādhyamakahrdaya-Kārikā; Dhu-mahī sniṅ-pohi tshig-leṅur-byas-pa. 藏譯 No. 3855. Dsa 11b²-; 并転 No. 5255 vol. 96) 「第二篇眞実經の探究」(Tattvāmṛtatātre tattvajñānaśānā-paricchedo nāma trīṭyāḥ; De kho na ṅid kyi ses pa tshol ba) に釈說やの世界創造因の在在(īśvara) 等を批判する論法に類似する。ちなみか(1) はこの「世諦 (kāla, dus) ・純粹精神 (puruṣa, skyes bu) ・根本原質 (pradhāna, gtso bo) ・極微 (paramāṇu, rdul phran) 或はサマンヤカ神 (viśnu, khyab ḥjug) はこの世界の原因ではないこと」に反駁する(1) 及び、(2) かなる存在を決してサマンヤカ神 (keśava, sred med) ・并転神 (īśa, dhan phyug) ・純粹精神 (puruṣa, skyes bu) ・根本原質 (pradhāna, gtso bo) ・原干 (ānu, rdul phran) 等の原因からな生ずるか或は顯現せらるること(2)

『密持女鑑』(Prajñāpradīpa-mūlāmadhyamikāvṛtti, Dbu-mahi rtsa-bahi hgral-pa ses-rab-sgron-ma, 東北 No. 3853. Tsha 50p⁷-51a¹, 牋頁 No. 5253) に於て或はまた無因とせし悪因である。無婦等の如し。悪因(rgyu nan)とは何か。田莊(svabhāva, nō bo nid)と田莊性(īsvara, dban phyug)と純粹精神(puruṣa, skeyes bu)と根本原質(pradhāna, gtsō bo)と暗闇(kāla, dus)と那羅延天(nārāyaṇa, med khi bu)等である。真実でない故に、諸の存在はそれら無因より生起しなむとあり、同様に世界創造の原理を否定するのに相応する。この限り大乘中觀思想とブビダハマの教学の視点は一致する。

- (一) etena kālapuruṣapradhānāparamāṇah/kāraṇaṃ nāśya jagato viṣṇur veti niśedhayet // des ni dus daṅ skeyes bu daṅ // gtsō bo rdul phran khyab hjug dag // hgro ba hōi yi rgyu min par // dgag pa khoṅ du chub par bya/(Dsa 11b⁷)。五書總論【中觀顯宗の展開——Bhāvavivēka 概要——】華嚴社 昭和四十年 Sanskrit-Tibetan Text pp. 324-5.
- (二) na keśaveśapuruṣapradhānānyādi kāraṇāt/jyate vyajyate vāpi bhāvāḥ kaścit kathancana // srod med dbaṅ phyug skeyes bu daṅ // gtsō bo rdul phran la sogs paḥi // rgyu las skeyes daṅ gsal bya yi // dnos po hgaḥ yaṅ yod ma yin/(Dsa 12b⁹) 江島惠教 前掲書 pp. 330-331.
- (三) 『般若灯論』卷一(大正三〇〇五三三)「復次彼悪因者。亦名無因。如無婦等。何等悪因。所謂自性及自在天。丈夫論時。那羅延等不眞実故。是故此等無因。」山口益訳「月称造中論釈」弘文堂 昭和十二年 五九頁註⑦。同著「山口益仏教学文集下」春秋社 昭和四八年 二二九頁。田村智淳「ラジシエナーカライマテ」の有神論批判」(『南部仏教』二七号所収)一九七一年 二頁等参照。なほ『入楞伽經』(Lankāvatāra-sūtra) に於て通譯 Isvara (田莊) dbaṅ-po) は pradhāna, puruṣa, kāla, anu, prakṛti, svabhāva, yadicchā, svatantrakarṇi, viṣṇu, prajāpati など、の諸語を以てた文脈に鑑みて、(ed. by Vaidya, BST, No. 3. ① p. 182²-2⁶ ② p. 34²-3 ③ p. 402²-24 ④ p. 431⁰-11 ⑤ p. 742²-25 ⑥ p. 781²-1⁶ ⑦ p. 801²-12 ⑧ p. 92⁸ ⑨ p. 942²⁸-29 ⑩ p. 116⁷-8 ⑪ p. 1222²-26 ⑫ p. 1481⁷-18 ⑬ p. 1541²-32 ⑭ p. 1591⁴-1⁵ ⑮ p. 1591²⁰-21 ⑯ p. 1592²-25 ⑰ p. 161³-4) の如く同類の趣意を理解せしむ (ibid.; ① p. 872⁴-25 ② p. 1141⁵-1⁶ ③ p. 1592²⁰-21 ④ p. 1592²-25 ⑤ p. 161³-4)。

〔關係文脈B〕

断片 III、断片 IV で指摘した *īśvara* 批判は (1) *īśvara* 等が世界創造の原因たりえないこと、(2) 助力因 (*sahakārikāraṇa*) を待てず、(3) *tapoyoga*, *tapobala* と自在力 (*aīśvarya*) との内的關係、(4) 自存者 (*svatantra*) と依他起 (*pāratantrya*) などの文脈で捉えられる有神論 (*īśvara-vāda*) 批判であったが、是等との対比を以て論証の類似性がみられる。それは寂天 (*Śāntideva*, A. D. 650-750) の『入智辨行論』 (*Bodhicaryāvatāra*) 「第九章般若波羅蜜多明」 (*Prajñāpāramitā nāma navamaḥ paricchedah*) Kā. 119-126, 142 及び *ひんてん* *ひんてん* *ひんてん* (*Vikramaśīla Vināra*) 権門の守護者 *トレン* *トレン* *トレン* *トレン* *トレン* (*Prajñākaramati, Ses-rab hbyan-gnas blo-gros*) の『總論』 (*Panjika*) 中の一連の自在神批判を以てである。特に Kā. 124 で「特に助力因を欠くから (*sahakāriyikalayat*) 創造しないのだ」 (反論者) とならば *īśvara* の本因としての自性力、他に助力因を待たない常住・恒存性といった超越的神格は成立せず、自己矛盾に陥る」となること。Kā. 125 で自在神論者の和合因 (*samavāyikāraṇa*)、不和合因 (*asamavāyikāraṇa*)、動力因 (*nimittakāraṇa*) の三因による果 (*kārya*) を生ずるとする主張⁽²⁾、要するに「石女の娘の如く *īśvara* は成立しなう」と、Kā. 126 で依他起 (*pāratantrya*) の論理から *īśa* = *īśatā* = *aīśvarya* の等式、自在力、創造力の非理を論駁する。更に Kā. 142 で何れも *svabhāva*, *īśvara*, *pradhāna* の非因なるより生起しなうと、それ故に *puruṣa*, *kāla* 等の作者性をまた存在しなう。それらもまた因ではないからである」といった仕方での批判するのである。⁽³⁾

(1) 金倉圓照訳『悟りへの道』平楽寺書店 一九六五年、一九七—一九八、二〇二頁参照。ed. by Vaidya, *Bodhicaryāvatāra*

of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati, BST, No. 12, Darbhanga, 1960, pp. 258-261, 268. 同
口譯(註數)『文集』前掲書 二四四—二四頁參照。

- (2) samavāyikāraṇam, asamavāyikāraṇam, nimitakāraṇam ceti kāraṇatrayatī kārṇamutpadayate. ibid., p. 259¹⁷⁻¹⁸
NS. 4. 1. 21 以下之 Uddyotakara の [Vārtika] の区鑑(註)『Yacca nimitam taditarayoḥ sama-
vāyikāraṇāsamaavāyikāraṇayoranugrahākam, ibid., p. 457¹⁻³「そ(の)因なる(の)因」他(の)因(の)因(の)因(の)因
と不和因とを撰取する(の)因(の)因」H. Jacobi, ibid., SS. 75, 115¹⁶⁻¹⁷ 山田龍城・伊藤和男共訳『前掲書』一三六頁參照。
(3) purusakālakādikṛtatvamapi nāsti, teśānāpāhetutvāt. ibid., p. 268⁴

〔關係文脈〕

ブラジリニャーカライヤティの『細疏』及びニヤーンティラクミンタ (Śāntirakṣita, A.D. 630-740) の主著
『Tattvasamgrahaḥ (Bauddha Bharati Series I. II, 1968) が、その第二卷「自在神の考察」
(īśvaraparīkṣā) 、『カマラシラ (Kamalaśīla, A.D. 700-750 頃活躍) の『Pañjikā』「自在神を破棄するに正し
い論議手段の証明」(īśvarabādhakapramāṇopanyāsāḥ) 中、特に Kā. 87-89 を結びつへ。

〈自在神 (īśvara) は諸の生者の因ではない。生ずるものが欠けているから。空(の)蓮華の如し。もしそうでな
ければ、すべては同時に存在する(の)因となる(の)因。〉 (Kā. 87)⁽¹⁾

〈或は順序次第をもつて生ずるものは自在神 (īśvara) を因とするものではない。上述の論証から生じた愚人た
ちの觀念の如し。〉 (Kā. 88)⁽²⁾

これは AKB, ADV で釈説せる「一切法の順序次第による生起」論と関連し得る。そしてまた、
〈それらも彼 (īśvara) から生じたとする場合には論証を詮説することは無駄である。常住であるから治療を要

しないもの（自在神）としてそれこそ助力因とはならぬ。(3) (Kā. 89)

以上のような自在神否定の根拠は ADV の論証とよく符合するといふべき。

- (1) neśvaro jannināṅ hetururpattivikalatvatāḥ/gaganāmbhojāvat sarvamanayāṭhā yugapad bhavet // Kā. 87 // (p. 69¹⁻²)
- (2) ye vā kramena jāyante te naiśvarahetukāḥ/yathoktasādhanoḍbhūtā jādānām pratyayā iva // Kā. 88 // (p. 70¹⁻²)
- (3) teśāṃnapi tadudbhūtau viphalā sādhanaḥbhidhā/mityatvādacicikitsyasya naiva sā sahakāriṇi // Kā. 89 // (p. 71¹⁻²)

【關係文脈 D】

断片 VI で示した二つの典拠とが、

- (1) 時間 (kāla) と自在性 (svabhāva) と必然性 (niyati) と偶然性 (yadrchā) と (五) 大種 (bhūtāni) と胎 (yonī) と純粹精神 (puruṣa) となせるのくあひあひ。この二つの語をたゞのち。ノーマンの存在ゆゑな故也。ノーマンのあひあひの因の存在ゆゑな。 (kālaḥ svabhāvo niyatiryadrchā - bhūtāni yonīḥ puruṣa iti cintyā/saṃyoga eśāni na tyātmabhādātmā⁽¹⁾ pṛyaṃśaḥ sukhadūḥkhaheṭoḥ // Śvetāśvatara Up. I. 2.)⁽²⁾

- (2) 『スモンタタ・サンムタ』 (Suśruta-saṃhitā)

第三篇身体篇 (Sārīrashāna) 第一章の掲

偉大な見識な自在性 (svabhāva) と自在神 (īśvara) と時間 (kāla) と偶然性 (yadrchā) と必然性 (niyati) と時変 (pariṇāma) と時變因 (prakti, 質変因) と時な。 (svabhāvam īśvaram kālaṃ yadrchā niyatim

tattā/pariṇāman ca manyante prakṛim pṛthurdarsinah//))⁽²⁾

であり、前者は既にH・ヤロービドより注意せられたことである。⁽³⁾

自在 (svabhāva) と自在神 (īśvara) の両者の関係とは AKB (V-27) 中、經書部 (Sautrāntika) 所伝とされる有偏すなわち、自在 (svabhāva) は一切時に存在し、また有為的狀態 (bhāva) は常住であると認められる。しかも有為的狀態 (bhāva) は自在 (svabhāva) と異なるなごとは明らかた自在神 (īśvara) のなせる仕業である。(svabhāvah sarvādā cāsti bhāvo nityaś ca neyate/na ca svabhāvād bhāvo' nyo vyaktam īśvara-ceṣṭitam // p. 298²¹⁻²²) が問題となった。説一切有部 (Sarvāstivādin) は、事物の恒存の本質のあり方 (svabhāva) を変易する状態 (bhāva) の作用面を強調することと弁護しようとする。しかし、Kosakāra Vasubandhu などについては先の有偏の如き嘲弄の答釈を惹き起こすだけにすぎなかったとみる。結局、法性 (dharmata) は深遠である (gambhīra)。⁽⁴⁾ 人間の理性的手段 (tarka, 思辨) だけでは達成されがたごうごうのようになった。AKB のこの偈は『Tattvasamgraha』(Ka. 1801) に適用され、同題論文が『入菩提行論』(IX. 143) の『細疏』⁽⁵⁾ に記され、自他派によって共に批判の典拠となつてゐることが知られる。

- (1) Kṛṣṇajñānvediyāśvetāśvatāropaniṣecchānkarabhāṣyopetā, Anandāśramasanskṛitagrāhāvāhī, Granthāṅkah. 17, p. 18³⁻⁴. 宇井伯寿『印度哲学研究』五岩波書店、昭和四〇年、四三〇頁にも指摘をのべてゐる。
- (2) 大地原誠玄訳『シュネルタ本集』アーニルヴェーダ研究会、大阪、昭和四六年、一〇三頁。D・チャットーパディーヤヤー、佐藤任訳『科学・哲学および社会』(アーニルヴェーダ研究第8号、一九七八年度版)所収)アーニルヴェーダ研究会、一〇七頁註(60)参照。
- (3) H. Jacobi, Die Entwicklung der Gottesidee beiden Indern und deren Beweise für das Dasein Gottes, Bonn und Leipzig, 1923. SS. 38-9. 山田龍城・伊藤和男共訳『印度古代神観史』大東出版社、昭和十五年、六五頁。

- (4) AKB p. 301¹⁰⁻¹³; 北京版 p. 280, 285a¹⁻²; ADV p. 280⁶⁻⁸; E. Frauwallner, *Abhidharma-Studien V. Der Sarvāstivāda*, WZKS, 1973, SS. 115-6. N. Tatia, *Sarvāstivāda, Nālanda, 1960*, p. 31. 秋本勝・本庄良文「俱舍論—三世実存説(説註)」〔南都仏教〕41号所収、一九七八年、九一、九八頁註(23)。西義雄「国訳一切経」毘曇部二十六下、八二六頁註58に経量部所伝の偈として紹介する。村上真完「永遠の有と転変—サーンクヤ哲学と世親—」〔仏教思想史2〕所収、平樂寺書店、一九八〇年、一四、一八頁参照)。なお灯論作者(Dīpakara)は三時説、普遍的実在を根拠づけるために提起した命題のなかで、永遠常住の実体を認めるウエーダや教論の学説を仏陀の本意に即して批判する自らの意図をこれに対する(俱舍作者(Kośakāra)なごし経量派(Sautrāntika)がウエーダ・教論と同列に論する不当な曲解を破滅している。拙稿「有部論史上における Abhidharmadīpa について」〔曹洞宗研究員研究生研究紀要1号〕所収、昭和四四年、五四頁以下)。フョットマンの svabhāva の本質概念はウエーダ・ミンヤッタ哲学の視座からも見直され理解されるべきではなか。D. Chattopadhyaya, *What is Living and What is Dead in Indian Philosophy*, People's Publishing House, New Delhi, 2nd. ed. 1977. pp. 456-7.
- (5) *kāritram sarvadā nāsti sadā dharmastu varryate/dharmān nānyacca kāritram vyaktam devaviceṣṭitam // Kā. 1801 // (Bauddha Bharati Series, vol. II, 1968, p. 619⁶⁻⁷)*
- (6) *svabhāvah sarvadā nāsti bhāvo nityaśca neyate/na ca svabhāvābhāvo'nyo vyaktamīsvareṣṭitam // ti // (ibid., p. 271¹⁰⁻¹¹)*

〔関係文脈E〕

外教において注目すべき論典は「サーンクヤ・カーリカー」(*Sāṅkhya-kārikā*) の註釈書「エッタヤデービーデーカー」(*Yuktidīpikā*, YD) である。⁽¹⁾ 宇宙万有の根本原理として極微 (*paramānu*, 原子) ・純粹精神 (*puṇsa*) ・自在神 (*īśvara*) ・業 (*karma*) ・理命 (*daiva*) ・自性 (*svabhāva*) ・時間 (*kāla*) ・偶然性 (*vyadīcchā*) ・非存在 (*abhāva*) を列挙し、各々世界創造因としての不合理性を論証する箇所である。そして諸原理のうち *īśvara* に対して最も多く傾注せられてゐるところが印象的である。⁽²⁾ G・チェンバラティは「パーシユンタ派およびヴァイ

シネーシカ学派のイーシネヴアラ説に関する『ユクティディーカー』の考証⁽³⁾のなかでその理由として多数の *Īśvara* 説の信奉者がおったこと、急速に思想的基盤を獲得した教説であること、YD 作者の見解において論駁しなければならなかった対外的重要さを指摘している。

アビダルマ思想史上における ADV の確証を得るための作業を進めるなかで実はこの YD の存在に注目したいのである。

YD の校訂出版者である P・C・バンデーヤは序文 (p. XV) で陳那 (Dignāga, A.D. 400-480 頃) 以降ヴァーチャヌパティシッカラ (A.D. 841) 以前の位置づける。周知の如く、E・ノラウヴァルナーは西紀五五〇年頃に比定せられた⁽⁴⁾。最近では更に本資料にタルマキールティ (Dharmakīrti, A.D. 650 頃) の影響が予想されシャンカラ (Śaṅkara, A.D. 788-820 or 700-750 頃) との前後関係も検討するべきであるとみられる。従って YD の年代基準も未確定の段階であるといわねばならないが、特に ADV との思想的意義においてその資料的価値は大きいように思われる。

- (1) Yuktidīkā, ed. by P. Chakravarti, Calcutta, 1938; ed. by P.C. Pandeya, Delhi-Varanasi-Patna, 1967; *Saṃkhyā-akārikā*, ed. by R. Tripathi, 1970. Chakravarti, pp. 47¹⁶⁻¹⁸, 82⁴⁻⁵; Pandeya, pp. 40²⁰⁻³¹, 68²¹⁻²²; Tripathi, p. 49⁷⁻⁹; G. Chemparathy, 'The Testimony of the Yuktidīkā Concerning the Īśvara Doctrine of the Pāśupatas and Vaiśeṣikas', *WZKSQ*, Bd. IX, 1965, pp. 121-2; 134-146. 山本快龍「六派哲学に於ける神の問題」〔宗教研究〕所収、一五—一六頁。中田直道「Yuktidīkā に於ける三種の推論」〔鶴見大学紀要〕13号所収、昭和五年三月、一八一頁。村上真完「サーンタヤ哲学研究——インド哲学における自我観——」春秋社、一九七八年、三二〇—三三八頁註(8)。茂木秀淳「Yuktidīkā の研究 II」(印公研二七一—二四五三—四四八頁)。同「サーンキヤ派における創造神の觀念の変遷」〔宗教研究〕二四〇号所収、一九七九年六月、六八頁)等参照。

- (2) Chakravarti, pp. 84²⁷⁻⁸⁸ (九五頁); Pandeya, pp. 70²⁵⁻⁷³ (八五頁) 因みだ *Paramāṇu* (Chak., pp. 82⁵⁻⁸⁴; Pan., pp.

- 68³²-70²¹)。Purusa (Chak., p. 84²¹-26; Pan., p. 70²²-25)° Karma (Chak., p. 88⁵-25; Pan., p. 73¹⁶-27)° daiva (Chak., p. 88²⁵-26; Pan., p. 73²⁷-28)° Kala (Chak., pp. 88²⁷-89¹; Pan., pp. 73³⁰-74⁷)° Yadyecha (Chak., p. 89¹⁰-12; Pan., p. 74⁸-10)° abhāva (Chak., p. 89¹³-14; Pan., p. 74¹¹-12)° svabhāva かの範疇から脱漏してはるるごうの検討を要す。° G. Chemparathy, *ibid.*, p. 122 ff.
- (c) G. Chemparathy, *ibid.* p. 122.
- (4) E. Frauwallner, *Geschichte der indischen Philosophie*, Bd. I, Salzburg 1953, S. 287; *History of Indian Philosophy*, vol. I, Delhi-Patna-Varanasi, 1973, p. 226. G. Chemparathy, *ibid.*, p. 121.
- (5) 中田直道「ことばと推論——ユクティディービカーにおける(和訳と校訂)」〔中村元博士還歴記念論集インド思想と仏教〕所収 春秋社 昭和四八年、三七—三九頁。本多 恵「ユクティディービカー雑考」〔印仏研二七一—二六四頁〕。同著「サーンキヤ哲学研究上」春秋社 昭和五五年、六六—六六頁参照。

〔小 結〕

以上 ADV のなかの自在神 (Isvara) 批判に関する若干の論点をきとめ ADV の学説史的考証の端緒を見出すとした。世界創造の原理としての自在神を否定するために AKB とは別異な展開の仕方、つまり外教諸派のカテゴリには一定の副次的意義を認め思潮的接触をはたしたかたちにおいて、また、仏教学派内では後期大乘仏教の思想交流を跡付けるかたちにおいて論証を進める点で注目される。しかし断片 VI などにみられる vidhi, vidhāna, nityati, svabhāva, kāla, grāhā, karma, daiva などの重要な用語は isvara をめぐってなお多面的に検討されねばならないであろう。後期アピタルムム仏教が学説的にきわめる方向は意外に広く外へ開かれていたのかもしれない。ADV 成立に関してシャイニが設定した著者ヴィマラミトラ (Vimalamitra, A.D. 450-550) は種々なる角度からなお検討されるべきであると思われる。今は推測の域を出ないが、思想的意義をふまえて、勢い YD

作成時代と併行または前後した展開過程に準えADV成立の時代考証もかなり後代まで拡大してもあながち不当ではないように思われる。

本稿はインド哲学諸派の神学上の交渉について殆ど触れられなかった。今はアビダルマ思想史におけるADVの外面的考証の問題に焦点をあてるにとどめ今後の課題としたい。